生：内部－外部

ハンス・ライナー・ゼップ（プラハ・現象学研究センター）
（訳：谷　徹）

Ⅰ．身体現象学の主題としての、内部－外部の関係

内部と外部の関わりは、多様な仕方で問われうる。では、どのような仕方でこの関わりを問うのが、根本的な問い方なのだろうか。

問う者、それは人間である。人間であるというあり方のなかで最も端的かつ同時に最も根源的なあり方は、「生きる」ということのうちにある。生きる〔＝生〕とは、ひとつの源泉的根拠(Quellgrund)から活動するということを意味する。このことのうちには、二つのことが含意されている。ひとつには、生は、それぞれひとつの源泉的根拠から流れ出るものとして、「譲渡不可能」であるということ、もうひとつには、この源泉的根拠の事実(Faktum)は、それの担い手にとって完全に塞がれてはいない〔つまり、源泉的根拠の事実性がそれぞれの生きる者に何らかの仕方で開示されている〕ということである。この意味での生の遂行はつねに、〔譲渡不可能性に関わり、また源泉的根拠の事実性が開示されているところの〕一個の自己(ein *Sich*)として活動するということを意味する。それゆえ、人はたいてい「もろもろの事物のもとに」〔＝おのれの外部にいわば出て〕存在しているとしても、このことさえも、人は次の事実を――すなわち、他なるもののもとに存在するのは、ただおのれの自己という場(Selbst-Ort)からのことにすぎないという事実を――痕跡的な仕方でともに意識している、ということを排除するものではない。その逆に、……のもとに存在することができるということは、そのことによってしか自己から（相対的に）遠ざかることができないような能力(Potenz)を前提にしているのであって、それというのも、〔人は〕このように遠ざかる場合にも同時に、たとえ非主題的にせよ、自己に関わっており、また関わりつづけることをやめないからである。したがって、ひとつの源泉的根拠から自己を遂行・成就する〔＝生じてくる〕(*sich* aus einem Quellgrund heraus vollziehen)[i]という意味での活動としての生は、ある根源的な内的関係を印すものとなっているのである。こうした内部への関係は根源的であって、それというのも、自己自身を遂行・成就する生が、この関係よりさらに下に降りていくことはもはやできないからであり、仮にそのようにすれば、この生は、それが遂行的に存在するなかで、おのれを欺くことになってしまうだろう。

こうした、内部存在の痕跡的な規定を背景にして、「外部」の意味のいくつかのあり方が明らかになる：

1．……のもとでの存在は、それ自身、ひとつの意味での外部を含意している。それはすなわち、諸事物や人間仲間たちに向かうわれわれの行為の行動空間、を表わしてい

る。この意味での外部は、相対的に弱い〔意味でのそれである〕。というのも、それは、構成的に見て、内部存在の（暗黙の）経験に依拠しているからである。ただし、この意味での外部は、存在論的な意味水準と、存在的な意味水準に区別されるべきである。すなわち、存在論的な水準は、……のもとでの存在を現実化(aktualisieren)することができるための可能性の条件そのものを示しており、そして他方、存在的な水準は、存在論的な水準によって開かれた次元に言語や感情が具体的なもろもろのケースにおいて関与するなかで、実現されているのである。この意味での外部は、自然的態度の働き方すべてにとって痕跡的になっているのだが、ただし、この場合、見逃されてならないのは、それが文化的および歴史的に〔さまざまに〕差異化されるということである。

２．第二形態の外部の意味規定は、哲学的および学問的な反省のなかで生じてくるのであるが、それはまた、自然的態度のなかですでに働いている意味規定性が徹底化されたものでもある。とは言っても、自然的な非学問的態度では、……のもとでの存在を、たとえ非主題的なままにとどまっているとしても、その……のもとでの存在を可能にしている〈自己関与〉に遡って結びつけている関係がまだ無傷のまま残っているのに対して、反省的態度では、この関与が直接に標的となる。〔このとき〕反省的態度のおかげで、作動している自己は、なるほど主題的にはなるが、けれども、その作動のなかでこそ表現されているようなそれの特性を本質的に歪曲してしまうという代価を払うのである。〔じつは〕自己が主題的になるということは、ある迂路を経由して起きるのであり、詳しく言えば、自然的態度のなかで――たとえ暗黙のままであれ――いつも自己というものの依存性において経験されている〈……のもとでの存在の外部〉を解放する作業を経由して、起きるのである。〔しかるに〕ヨーロッパの形而上学、そして、それにつづく諸科学は、外部を、客観化可能な即自存在とみなし、このことによってさらに、客観するまなざしを自己にも適用する。このことによって、この自己は、自己から切り離された外部と同様な仕方で客観になるような仕方でのみ、主題的になる。つまり、自己がそれ自体外部になってしまうのである。

３．非主題的にとどまる経験のされ方において経験される外部を、自然的、非学問的、非主題的な仕方でフィードバックさせるということも、そしてまた、この外部関与と、自己のなかにあるそれの基礎とを、科学的に客観化するということも、外部関与の二つの仕方ではあるが、これらはまた同時に、意味関与の可能性である。しかしながら、これに対して、先意味的、非意味的な、外部の経験といったものがあるのだ。すなわち、それ自体では名前をもたず、それを経験しているわれわれによる受動的な意味の受容においてはじめて、名前と意味を与えられる、実在的なもの(Reales)[ii]の端的な圧力や衝突において経験される抵抗性である。したがって、世界を生きること、それとともに、外部への諸関与は、いつも、二つのものによって刻印されているのである。すなわち、〔一方で〕有意味な諸構造によって、しかしまた同様に、〔他方で〕実在的なものの純粋な切迫性によって、である。

〔１〕自然的な行為空間としての外部、〔２〕客観化可能な量としての外部、〔３〕意味をもたない、抵抗的な実在性としての外部――これら三つの外部関係の様式は、互いにどう結びついているのだろうか。それらが一体となるところは、身体である。抵抗性

というものが、身体的にのみ経験されうるということ、すなわち、ある身体のなかに受肉し、時間と空間と堅固な諸物体のただなかに投げ込まれている存在者によってのみ、それゆえもろもろの事物との摩擦のうちにあるとともに、時間による消耗にさらされている存在者によってのみ、経験されうるということ、このことはよく理解されるだろう。その他方で、まさに人間の意味関与もまた身体的に係留されたものであるということは、現象学研究がすでに以前から示してきたところである。現象学は、当初から、有意味性によって規定された、自然的な生の外部関与を、また、哲学や科学によるその意味の過剰形成を、身体的に構造化されている体験配置へと連れ戻そうとしてきたのである。

けれども、外部関与の体験すべてが身体的に中心化されており、そのなかで現象学的に解明されうるとすれば、その場合、外部関与１および２における意味的成分と、意味的に媒介されていない外部関与３との差異はどうなるのだろうか。これら三つの関与が身体に媒介されているというのは、争う余地もないことだが、それにもかかわらず、なお、詰まるところ有意味な存在者に関わる現象学的研究にとって、それらを接近可能にしてくれるような何か共通の特性が〔それら三者に〕あるのだろうか。われわれとしては、この問いに対して、暫定的にテーゼの形で対応して、これら三つの関与の現象学的探求可能性から出発することにしたい。すなわち、この探求そのものに関して、われわれは、別のところで導入し詳細に展開した[1]、ある区別をもちいる。つまり、身体的なものを、意味〔としての〕身体(*Sinnleib*)[iii]、方向づけ身体(*Richtungsleib*)[iv]、限界身体(*Grenzleib*)[v]へ区別するのである。

方向づけ身体性とは、それにおいて、身体的諸性向が空間的な可動性や心的な伝達関係の〔さまざまな〕変転のなかで形成されてくるような、構成形態である。そのような身体的諸性向は、すでに〔いわゆる意味の先行形態としての〕原意味的な媒体のなかで遂行・成就されてくる〔＝生じてくる〕のであり、これが意味の本来的な構成のための基軸を与えるのである。しかしながら、あらゆる意味身体性や方向づけ身体性よりも「深く」、また根源的なのが、限界身体である。「限界身体」とは、実在的なものの抵抗性を先意味的に出会わせるところの身体性である。限界身体は限界を印しづけているが、それはいくつかの観点から示される：〔第一に〕私の身体の外皮において、「私」を、私の身体でないすべてのものから分離しているラディカルな限界；次に〔第二に〕、受肉した身体は、身体にその有限性の深淵を経験させる現実を、ある限界とともに「最初に」決定的に経験するが、その限界；そして〔第三に〕、方向づけ身体や意味身体といった身体形態を追い払ってしまうような限界がある。かくして、内部－外部のラディカルな問題系に気づかせるのが、何にもまして、この限界身体なのである。

この問題系は、以下で、ある例を手がかりにして、現象学的にさらに解明されるべきである。その例は建築から引き出される。それは、日本人建築家、坂本一成の *Haus SA* である。この例を分析することによって、われわれは、応用現象学の分野で、ある具体的な試みをする：これは、つまり、生活世界やテクネー――建築――といった現象での、それの信憑性を検証する分析である。けれども、これは、単に、現象学を建築に応用す

[1] 「像と身体。外因性の心的事象」Cathrin Nielsen, Michael Steinmann und Frank Töpfer (Hg.)『心身問題と現象学』(*Orbis Phaenomenologicus Perspektiven N.F.*, Bd. 15), Würzburg 2007.参照。

る可能性を検証するものではない。むしろ、具体的な〔事例の〕分析を通り道にしてこそ、同時に、現象学的な身体性の理論――生にとって枢要な、内部と外部の関与を探求するものとしての――のための礎石が与えられるのである。

II. 応用：建築分析

住居として考えられた家々を建てること、これは、身体性への独特な関係を含んでいる。家によって、身体はいわば第二の周囲-身体をしつらえられるのである。あるいは、すでに衣服がその第一の周囲-身体を印しづけているとすれば、第三の周囲-身体を、である。身体を第二の皮膚のように覆う衣服とは対立的に、身体は、その居住によってある空間的な距離を繰り広げる：身体は、身体にとってのこの新たな身体のなかで動き回るのであり、これのなかに存在するのである。けれども、身体はそこから外に出ることもできるのであって、身体は、この身体-代理物を、内部および外部から体験できる。そのような体験は、限界身体、方向づけ身体、意味身体のすべての身体機能に関わるけれども、歴史的にも文化的にも、いつでも同じ仕方で、というわけではない。われわれは、身体性の機能としての「家性」(Häuslichkeit)がヨーロッパでどのように経験されているか、その仕方を特徴づけることでもって、分析を開始しよう。

１．　ヨーロッパ的な、家の身体経験

ヨーロッパ的な家の考え方は、内部と外部の二元論から、そして、視覚の優位から出発する。家を計画する際には、その外観が問題となる。また、「骨組み・輪郭」(Skelett)：つまり平面図(Grundriss)と正面図(Aufriss)の見え方が問題になる。他方でまた、建築のひとつの特殊分野、つまり内装は、家の内的な形づくり・形態化(Gestaltung)のためのものである。けれどもここで、テーゼが定式化されるべきであろう。つまり、内部と外部の分割〔そのこと〕がすでに特殊にヨーロッパ的だというのではなく、むしろ、ヨーロッパ的なものが規定しているのは、そのような差異化の仕方(Wie)だ、というテーゼである。以下で、この仕方は、身体的な所与性の現象として、近代以前の古典的-ヨーロッパ的な家の類型に即して示されるべきであろう。しかも、意味身体的、方向づけ身体的、境界身体的なものとの関わりにおいて、示されるべきであろう。

家をめぐる内部と外部のヨーロッパ的区別は、公的空間と私的空間の差異と一体になっている。家の外観が公共的にもつ重要性を示すメルクマールとなるのは、ファサードである（図１）。その基本構想の段階においてすでに、ファサードは、内部空間性とは別様に構想されている：内部空間が原理的にすべていわば有意義(bedeutsam)[vi]であり、この有意義性のなかで、この空間に住まう人間たちを実際に皮膚のように包み込んでいるもろもろの側面をもつのに対して、ファサードは、そのつど一側面的・一面的である。たいてい、「ファサード面」として認められるのは、家の一側面・一面にすぎない。そして、〔それを外部から見る人の〕視点は、ファサードが「最適に」認められるところにまさに固定される。最適とは、それが、代表象を示すための力を最も有効に投入する

ことができるところ、ということである。ファサードは、皮膚でもあるが、しかし、取り囲むのではなく、むしろ、甲羅・標識(Schild)[vii]のように出会われるのである。さらに、最も真なる意味でのファサードが皮膚のようなものだということが示されるのは、それが、衣装や仮面のように、建築物(体)(Baukörper)[viii]に「被される」ところにおいて、である。ファサードは、しばしば、〔舞台などで使う〕書き割り〔のようなもの〕でもあり、つまり、その建物を造った人が見せたいと思うものを第一に見せるべき書き割り〔のようなもの〕でもある。そして、書き割りと同様に、ファサードは人を欺くことができる。ファサードは、実情ではないものを差し出すことができる。あるいは、ファサードは、家の主人が掲げる主張・要求を強調することができるのであり、その際、この主張・要求が正当なものとして成り立つかどうかは、未決定なままなのである。〔もちろん〕内部空間も代表象的な目的に従うことがありうる。けれども、内部空間では、その代表象は、いつも――〔公的役割をもつ〕王たちのもとでさえ――個人的で私的な相貌をもっている具体的な居住の観点と混じりあっているのである（図２）。

衣装のような外面は、それを着ている所有者に関する特定の情報を媒介するが、ただし、この情報は、ある一定の曖昧性と接近不可能性をもちつづける。これに対して、内部空間は〔逆にむしろ〕開かれており、そして、ファサードが漏らすことのない秘密を、秘密でなくしてしまうことがありうるのである。この両者の区別をしっかり押さえておくことにしよう。ファサードは仮象との戯れであろうとする傾向をもち、これに対して、内部的なものは「機能的飽和状態」〔＝機能満載状態〕にあり、それの機能的な諸関係のなかで一歩ずつ認識されていくことができる。この両者の異なった指示体系は、その意味からして、ヨーロッパ的な家において伝統的に内部と外部がどのように特徴づけられてきたか、その仕方を特徴づけているのである。

さて、そのような空間のなかで広がる、またそれとともに広がる方向づけ身体性に注目してみると、身体は、建物の内部で、文字どおり、すべての方向において、空間を占有し、空間を多機能的に定義している；そして、このように方向づけるとき、身体は、ヒエラルキーを形成することができる。顕著なのは、ヨーロッパ的な内部空間では、身体体験の方向づけ傾向は、それから遠ざかって〔四方の〕壁へと逃れ去っていくということである。おのれのうちに中心化された身体は、居住の領域のなかでは、外部に向かっておのれを投企するのである：そして、それは、壁飾り、家具のなかで消失する。暖炉ですらも、（台所は無視するが）壁に設置されている。〔ちなみに〕相対的に中心的な位置に置かれているのはたいてい炉や食卓だけだということに注意を向けるのは、どうでもいいことではない（図３）。

壁へ逃れていく動向でもって、身体は、ファサードに向かう身体挙動をある仕方で繰り返す。つまり、ファサードの甲羅・標識的性格がそれの代表象的価値を告げ知らせるのに役立つとすれば、この代表象的機能が、内部空間の壁を強調して〔外部に〕形態化することで繰り返されるのである。方向づけ身体的なものとして解釈すれば、代表象的運動の諸傾向のなかには、〔おのれの〕自己同一性〔を外に示そうとする〕主張・要求が表現されているが、この主張・要求はしばしば同時に、力を示すジェスチャーでもある。力への意志は、いつも最も直接的な運動方向のなかで、その受容者たちにおのれを表現しようとする。そして、その意志は〔ファサードでは〕仮象を選び取るのだが、そ

れは、もっぱら、その仮象でもって、その意志がおのれの力を現実化できないところ、あるいは〔当面〕現実化しようとはしていないところで、その力を誇示するためである。〔しかるに〕たとえば、要塞のような建築作品、これは、力を代表象するばかりでなく、力を〔実際に〕行使しようと意志する、純粋な力の建築作品であって、これにおいては、仮面のようなファサードは、はがれ落ちるか、あるいは、直接的な力の誇示に役立つメルクマールに集約されてしまう（図４）。

方向づけ身体的なものの分析は、意味身体の分析の成果を確証する：すなわち、ここでも、内部空間と外部空間の差異が成り立っており、そこからして、内部と外部は、ほとんど〔相互に〕通過不可能な二つの体系のように現われるのであり、そして、両者が〔相互の〕通路をもつとすれば、それは、両者が、運動方向を決める参照軸をつうじて、たとえば、外部空間も内部空間も越え出ていく力への意志の誇示、あるいは力そのものの〔外部への〕代表象をつうじて、互いに結びつきを保つかぎりにおいて、である。

しかし、この場合、限界身体はどのような相貌を示すのか。われわれは、特別な場所、つまり、そこで限界身体的なものが何よりも体験可能になる場所に注目しよう。それは窓である。ドアや通路（敷居）のような、ファサードの他の開け方と並んで、その透明性において、意味身体的、方向づけ身体的、限界身体的な現象の諸層が、ひとつの焦点のうちにあるように互いに浸透し合うのが、とりわけ窓なのである（図５）。

ヨーロッパ的建築では、窓は二つの目的をもつ。〔一方で〕可能なかぎり多く光を入れる（そしてそれとともに、換気し、暖かさをコントロールする）ためであり、また〔他方で〕、室内空間から、開けた場所を見晴らすことができるためである。この二つの目的は、注目に値することとして、ある不足が先に体験されていたことによって定義されているのであり、その不足とは、穴というその原型に見られるような、打ち開くことのできない空間を特徴づけている不足である：それは、十分な光の不足と、眺望の欠落である。それゆえ窓はここで、その根本的理念とともにすでに、ある限界を示しているのである。この限界は、それぞれ特有の場所に関して成り立っており、そして、この場所を越えていくという衝動のなかでこそ〔逆に〕活性化される限界である。この衝動とは、要するに、遠くへ、そして光へ、ということであって、超越ということと同義的なのである。窓は、たしかに、ある（一定の）乗り越えを許すが、しかし、そのしつらえのなかでは、それは、あの不足を示し、また通過できない壁によって囲い込まれた住まいの限界を指し示しており、しかもそればかりでなく最後に、この限界を実際になくしてしまうことは、叶わないのである。入れられるべき光は、いつもただ多少とも明るいというにすぎず、また、視界はただちに二重に限界づけられる：窓とは、ひとつの態度〔＝焦点設定〕(Einstellung)であり、ひとつの立場である；つまり、窓枠そのものが、見られるべきものを排除し(ausgrenzen)、また局限する(abgrenzen)。窓枠がこの排除と局限の仕方のなかで同時に代表象するところの、見られるべきものを、である。〔たしかに〕この代表象の作用のなかで、窓は、まなざしを開き、まなざしを、窓がそこへと開くところの世界の一コマの深みへと逃れさせる。けれども、この逃れの可能性は、ただ目にとって成り立っているにすぎない：人は通常、窓をとおって室内空間を離れることはないということを思い出させるのが、窓下の壁の部分である。かくして、まなざしは外部へ

連れて行かれるのに、この窓下の壁の部分の抵抗性が身体を内部に連れ戻すわけである。
身体現象学的に見て窓が創設する限界は、かくして、解放と妨害との同時存立的な背反関係のなかで形づくられてくる、現実の経験のなかに暗黙に含まれた抗争現象を、特徴づけている。もろもろの可能性を開くと同時に塞ぐ動向のなかで、おのれの固有な場所の非-主題的な気づきと、そのなかで、「内部」を「外部」から区分するものの限界意識が構成されてくるのである。
窓という限界現象性は、身体的な限界経験と直接に対応している：というのも、この限界現象性は、閉じた空間性のなかでの先意味的な身体経験から生じてくる抗争性から、可能性と妨害の緊張関係を仕入れているからである。半ば開いた壁による引き留めのなかに、つまり、限界身体的なものの領分におけるこのエポケー〔＝超越動向の中断〕のなかに、その上に建つ、方向づけ身体的なものや意味身体的なものの身体性経験が係留している。〔これに対応して〕窓は、固有なものから公的なものへの想像上の越境を印しづけることによって、固有なものの同一性表象や力の表象を伝達するための可能性の条件をなすのである。扉と同様に、窓は、内部と外部を媒介するが、しかし、その媒介のなかで分離させる蝶番である。けれども、扉の敷居と対比的に、窓下の壁部分は、限界身体を格別に強く家の内部に結びつけている。このようにして、ヨーロッパ的な窓という限界現象において、内部と外部の二元論が構成されるのである。

２．　坂本一成：Haus SA

（図６）坂本一成の Haus SA は１９９９年に建てられた。それは住居であり、私的な目的に使用される。一見すると、その家は、それの諸次元においてうまく同調した、個々の建築部分の集合体のような印象を与える。それは、四つの部分グループに区別される。一番下には、観賞のための壁をともない、錐状に傾斜した高い台石。これは、日本の石垣の基礎を思わせ、家の傾斜地形のおかげで家の二つの側面において見えるだけである。これの上に〔第二に〕、箱のように置かれた直方体がある。これは、家の下部と、開いた車庫に場を提供している。この直方体のうえに〔第三に〕、家の主要部分がそびえている。これは、おおように形作られた居住区域であって、家の内部で上に向かって開いており、そのおかげで、外部からは分離した要素のように見える〔第四の〕屋根の空間も取り込んでいる。四つの建築上の部分領域は、その素材によっても、その色彩によっても区別されている。観賞のための壁にもなっている基礎の上に置かれた直方体は、その幾何学的な閉鎖性のうちにありながら、開いた車庫空間によって打ち開かれているのみならず、その二つの側面――それらは基礎の軽いベージュ色に白色と日本茶の緑色を付け加えている――が基礎の外面の形態形成とは異なった幻惑的様式を示しているという点でも、区別されている。居住空間の外装と天井は、青い色調に保たれている。
形のつくり・形態化(Gestaltung)においても、建築の諸部分は異なっている：基礎が均質的であり、一階も、その側翼部分が車庫への開口部と小さな窓の開口部をもつだけであるのに対して、二階は、一連の高い窓の開口部を呈している。素材と彩色は、よく考えて選んであり、ある情報を送っている。基礎は、日本の石垣を〔いわば〕引用することで、実際、土台・地を与えるもの(das Gründende)であり、〔大地に〕根付いたものであ

ることを伴意的に示しており、一階は、土台・地を与える自然を指し示している：日本茶的な緑色の側面に、樹のための空間が確保されているのは、偶然ではない。屋根と、大きな前面の窓のある二階の青色は、大地的なものや自然的なものの領分の上に置かれながら高みに向かってそびえ立つ、静かなる精神の明澄性を示している。

けれども、この建築は、建築的要素を使用するだけでなく、この使用を示してもいる：基礎が実際には石で石積みされておらず、石積み構造に入れられた線は、ただの目くらましであるということが、その稜や上面で意識的に認識されるようにされている。白いファサードは、それの下にある層に、そして、緑色の壁の構造に、ただ貼り付けられているだけのものとして、無遠慮に示されている。それで、この建物は、個々の要素で造られているというだけでなく、ただ外的に寄せ集められた諸要素に分解してしまうという印象を与えることになる。この印象は、二階の上に不均等に置かれた屋根によってさらに強められる。だが、これで終わりではない：諸要素への分解は、最後に、建築の諸部分そのものが差し出してくる暴露によっても裏付けられる：つまり、〔基礎は〕本物の石の基礎ではなく、目くらましの偽物なのである：そして、考えうるかぎり最も単純な仕方で「皮膚」として与えられるファサードもそうである。では、この建物全体が、多側面性のドキュメント、伝統的な諸要素のポストモダン的戯れにすぎないのだろうか。

まったく違う。建物は、個々の要素に分解してしまうわけではない。建物の諸部分それ自体は、これらの諸部分を互いに媒介する、ある運動を形作っているのである：大地から自然を経て精神的なものへ――そして逆方向に。二階は、自然的なものや大地的なものを指し示す諸領域に結び付けられているが、それでも、それらの上にそびえている。その青色には、茶色の痕跡が混ぜ込まれている――これは、ここでは精神が自然や大地からあまりに遠ざかっていないということの示唆でもある。

このことでもって、坂本は最大限の緊張関係を試している：すなわち、一方で建物の個々の部分と、そして他方で互いに向かう運動のなかで同時に成り立っているそれらの媒介との、相違によって生み出される緊張関係を、である。この緊張関係は、さらに別の動的な次元を示す。それは、見ることができず、感じ取られねばならない次元である。それは、ここでは――古典的なヨーロッパの建築作品の場合とは異なって――第一義的に視覚が要求されるのではないということへの示唆である。視覚器官は、二つの本質的な契機によって特徴づけられる：それは、可視的なものがアスペクトをもつということに相関し、かつまた、その客観に対する身体の距離に相関する。〔しかるに〕Haus SA の建築的諸要素の相互関係は、もろもろのアスペクトの関係のなかで消えてしまうというのでなく、むしろ、直接には見えない緊張関係を指し示しているのであれば、視覚を手段としつつ〈ここ〉から発して〈そこ〉の見え方を与えるような距離も、じつは、存在しないのである。〔それゆえ、ここでは〕目の有意味性のおかげで距離を飛び越えるのではないような身体的経験、むしろ、〔自身が〕建築構造のなかに身体化されるような身体的経験が要求されているのである。

実のところ、この身体化への「要求」は、この建築の諸要素そのものが掲げているのである。建物を、見え方を尺度にしたヨーロッパ的な目でもって眺めることから離れるならば、そして、その代わりに、建物を空間のボリュームの相互関係として知覚する〔＝

真に受け取る〕ことへ移行するならば、意味身体的なものや方向づけ身体的なものは、その価値が引き下げられる：〔この場合には〕人は、建物を形作っているもろもろのキューブのなかに受肉したのである。互いに嵌め混み合い、屋根を冠せられて、建物を形作るのは、三つのキューブである：基礎――一階――二階。加えて、これら三つのキューブは部分的に容易に動かされるものであり、この事実によって、それぞれのボリュームの異質性が強調される。これらのキューブのなかで、またこれらとともに、建物の諸部分の差異性と同一性とのあいだの緊張関係が、はじめて完全に実現される：つまり、建物の三つのキューブ的な諸部分には相違があるが、それらの諸部分は、しかし、同時にキューブの全体的まとまりそのもののうちにそれらの共通性をもつのである。そして、それらの諸部分は、キューブ的なものそのもののなかに原理をもつがゆえに、ばらばらに、関連のない諸部分になってしまうことはない。逆である：それぞれの部分は、全体の痕跡を担っているかぎり、全体を輝かせるのである。しかし、このことは、差異性と同一性との差異が、外的なままにとどまっておらず、絶対的な内部で耐え抜かれているということを意味する：〔このことによって〕それぞれの要素のなかで、それ自身からして、それの限界が体験可能になるのであり、そして、この限界は、個々の要素を――それが乗り越えられるわけではないが――上回るものを指し示している。

それゆえ、身体現象学的に見て、Haus SA は、身体的に係留された〈ここ〉から、方向づけ身体的および意味身体的な仕方で、外-観の〈そこ〉において出会われるようにではなく、むしろ、われわれが、〈ここ〉－〈そこ〉の距離を限界身体的なものへと開く運動を取り戻し、たとえわれわれがなお建物の「前」に立っているとしても、みずからを建築作品の内部に置き入れるように要求する。家の内部は、このような仕方ですでに外部において性起してくるのであり、その結果、内部と外部の二元論はひとつの動的な緊張の場に移されるのである。

同様のことが、家の内部を体験する時にも起こる（図７）。今〔家の内部を見ると〕、屋根の部分と二階がひとつの空間を形づくっている様子、そして、背の高い窓が床の角にまで届いている様子がわかる。窓には窓下の壁部分がないので、限界身体は、抵抗性を経験しない。この抵抗性は、窓から外に出て、アスペクト的な組成を持つ外部世界へ向かうまなざしにとって構成的であったはずのものなのだが。それは、「〔外部への〕眺望(Aussicht)をもつ」窓ではなく、むしろ、外部が内部で端的にともに現前するようにする窓である。この窓も窓枠をもつが、しかし、その窓枠は床にまで届いており、ここで重要なのは、ただ地平的にしか、それゆえ意味身体的および方向づけ身体的にしか、それの継続を外部に見出さないような内部空間ではない、ということを指し示している。外部はむしろ内部に「現に」あるが、しかし、矛盾的に、否定性においてあるのであり、それというのも、外部はほんとうに内部に入り込んでいるわけではないからである。外部はただ手の届かないものとしてのみ手が届くのであって、けれども、手が届くもののほうも、ただ、それがそれ自身のうちに、手の届かないもののための「空間」を許容するということによってのみある、というようになっているのである。

ここでも限界身体は方向づけ身体性を構成するのだが、しかし、方向づけ身体が、意味を外に連れ出しながら、その基底となる身体のほうは残しておくというような具合にではない。限界身体は、ここ、つまり Haus SA では、方向づけ身体性をおのれ自身のも

とに回帰させ、それゆえ意味を、超越性という遠方へ連れて行かずに、方向づけ身体性自身に拘束しながら取り集めるのである。けれども、この拘束は、ほんとうには完結になってしまうことがないため――それというのも、手の届かないものは、手の届かないもののままなのだから――、ここでも、ある動的な場が構成されるのであり、それはつまり、いつも新たに、手の届かないものそのものを現前させることがそこで試みられることができ、また試みられねばならないような場である。この場の動的性格は、このHaus SA の内装によって卓越した仕方で表現される：屋根の不規則な褶曲、内部の施工のキューブ的諸要素、そして、階段状にかつまた不規則に下降する床は、ある運動を生じさせる。それは、もっぱらそれだけが使用されている建築材、つまり木材のなかに、その生き生きした媒体をもつ運動である。木材という有機的な素材も、それ自身のうちに、ある矛盾を持ちこたえている：乾燥によって保存されることによって、木材は時間に抵抗し、かつまた同時に、乾いたものとして、ぼろぼろになりやすくなるのだ。

このようにして〔この家のなかでは〕日常の空間が、それ自体ひとつの流体になる。つまり、その空間を体験する者、それのなかで生きる者が、自分自身ひとつの矛盾として生存・実存するようにという申し出を〔この家から〕受け取ることによって、その他の日常空間の無名な同一性を免れるような流体に、である。人間が全面的に〈現〉のうちにありながら、それでもすでに〔時間の〕過ぎ去る運動に委ねられているのと同様に、この空間性は、それの飽和した〈ここ〉において、それと一体となって、表向きの係留のすべてが流動的であることを感じさせる。人間がこの空間に住むならば、彼は、獲得と拒絶のあいだの仲介者であるというおのれの存在を受け入れることになる。そのあいだにおいて、彼は、おのれがその身体の限界において経験してきた、そしてくりかえし新たに経験する実在性の衝撃、しかし、意味からも力からも滑り落ちる実在性の衝撃を思い出すことになる[2]。

この限界は、しかし、〔神や天が与えた〕災いではまったくないし、また単に有限性の印でもない。それはなによりも、生存・実存(Existenz)に空間を調達するチャンスなのである。それゆえ、坂本は、正当にも、次の可能性について語っている。空間の形づくり・空間の形態化(Raumgestaltungen)は、日常的な体験のうちに「亀裂」(Riss)を持ち込み、そして、自由・開かれたあり方(Freiheit)への新たなポテンシャルをもった新たな深さを開示することができる、という可能性である[3]。

そのような亀裂(Riss)は、この空間の形づくり・空間形態化(Raumgestaltung)に内在している。とはいえ、この亀裂は、見取り図〔＝囲繞する亀裂〕(Umriss)や正面図〔＝立ち上がる亀裂〕(Aufriss)や平面図〔＝地の亀裂〕(Grundriss)において形態化(Gestaltung)が可視化される[ix]、その仕方のことではない。むしろ、この亀裂は、すべての形態化の力動性を、それはそれとして振動する中心項へと収斂させると同時に、そのように形態化しておのれを身体として表現していく(sich ausleibend)生そのものをも、収斂させるのである：形態化――それは、ここでは、最深の意味で以下のような可能性である。つま

[2] 動的な場とその限界としての〈あいだ〉については、Tani Toru, „„Klinische Philosophie' und das Zwischen", in: *psycho-logik*, Bd. 1, Freiburg/München 2006, 304-316.参照。
[3] 坂本一成„Häuser: Poetik im Alltäglichen", in: ders.: *Häuser / Houses*, Basel, 2. Aufl. 2005, S. 10-11.

り、亀裂を接合することによって、時間の恐るべき経過を何度でもくりかえし阻止するという可能性であり、言い換えれば、ある行為の働きにおいて、つまり、生そのものがその基底における限界身体的な発出撃(Ausgriff)[x]のなかでいつも新たにある〔別の〕限界を創り出すような行為の働きにおいて、あの経過を阻止するという可能性である。――この〔別の〕限界とは、〔生が脱自的な〕時間上に〔現に今〕滞留する可能性を生みだす限界である；言い換えれば、ある〈あいだ〉を創設する限界である。この〈あいだ〉とは、〔自己完結しない〕脱-中心的なもの(ex-zentrisch)として、おのれがその内部においておのれの外部に債務を負っていることを知っている〈あいだ〉であり、そして、おのれを越えて-見る(über-sehend)〔客観化的な〕まなざしによっておのれを確かめることのない〈あいだ〉である。そしてまた、この〈あいだ〉は、実在性(Realität)に、そして死の実在性に、寄せては返す波のように触れる、そうした〈あいだ〉である。

意味身体性の相関項としての空間や方向づけ身体性の相関項としての空間が、それを体験する者にとって有限であるならば、そうした空間は、その根底〔＝地〕(Grund)において限界身体的なものによって線引きされる――亀裂によって切断される(*gerissen*)――からこそ有限なのだから、限界身体的なものは、それらの空間が成立するための条件であるだけでなく、空間を投企し空間に住みつくための自由・開かれたあり方(Freiheit)という特別な働きの根源でもある。このことを坂本の建築は扱っているのであり、そして、建築のなかで、彼は日本的な生の解釈のひとつの根本動向(Grundzug)を創造的に押し進めているのである。

図

Europa: Fassade

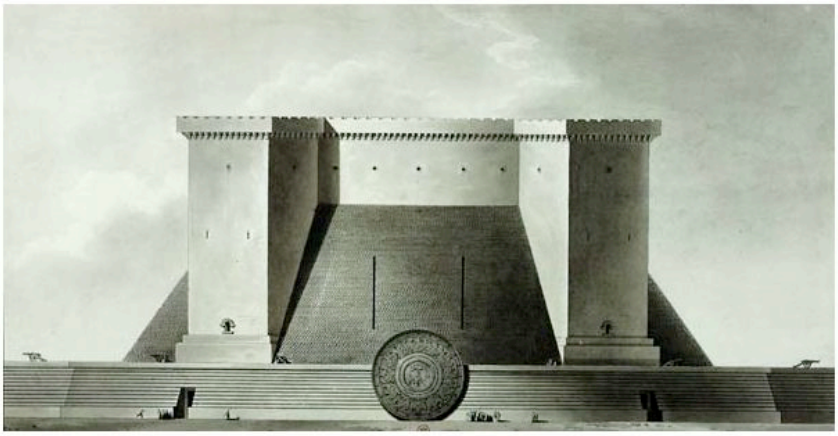
Europa: Interieur

Zacharie Astruc: *Intérieur Parisien* 1874

Europa: Interieur

Europa: Festungsbau

Etienne-Louis Boullée: *Fort* (nach 1784)



Europa: Fenster

Sakamoto Kazunari
Haus SA (1999), außen

Sakamoto Kazunari
Haus SA (1999), innen

訳注

---

[i] この sich vollziehen という語は、多様に訳しうる。通常は「遂行」という意味をもつが、それは「成就」へ向かう運動でもある。また、この再帰動詞を自動詞的に訳せば、そうした運動が「生じてくる」というニュアンスになる。

[iiii] ここで語られる「実在的なもの」は、文脈からわかるように、「意味」構成に先立つ、それゆえまだ「意味」としては捉えられていない、いわば、なまの現実といったものである。著者は、これをわれわれが経験するのは、われわれがこれに衝突するような場合の「抵抗性」においてだ、と考える。

[iiiiii] 「意味としての身体」（以下「意味身体」）とは、典型的には、メルロ＝ポンティの言う（科学が扱うような「客観的身体」に対する）「現象的身体」であり、通常の生活世界において経験されている身体、と考えてよいであろう。

[iv] 「方向づけ身体」とは、キネステーゼの方位設定ゼロ点として機能しつつ、その〈ここ〉から

方向を決定する身体、と考えてよいであろう。

[v] 「限界身体」とは、著者が現在取り組んでいるものである。意味身体や方向づけ身体よりも、これが根源的である。われわれは、この身体において、「限界」を体験するが、これが、それにつづく構成を根源的に動機づける。

[vi] この「有意義」は「意味」の一形態であるが、直接的には、おそらく、ハイデガーにおける道具同士の互いの指示連関が念頭に置かれているだろう。

[vii] Schild という言葉は、「皮膚」との直接的な対応関係においては「甲羅」という意味をもち、さらに一般的には「盾」を意味し、そこからさらに「標識」といった意味をもつ。ここでは、おそらくこうした意味の広がりのなかで、この言葉が使われている。

[viii] ここで Baukörper という言葉が使われているが、この文脈では身体と建築の関係が論じられており、しかも、Körper は「身体」と「物体」を意味する言葉なので、この関連を示すためにこの言葉が使われたのだろう。

[ix] ここでは、おそらくハイデガーの議論が念頭に置かれている。

[x] この「発出撃」は、おそらく、通常の意味での「内部」と「外部」を生じさせつつ捉え込むものであり、これが生じる場面／次元が「限界身体」であろう。そして、これは、時間的には、内部（現在）が外部に流出したり、外部が内部（現在）に到来したりすることではなく、むしろ、そうしたことが起こる場としての脱自的時間上にはじめて滞留可能な現在をある種の限界として形づくるようにさせるような出撃である。